様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２５０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2024
課題番号：２０Ｋ１０８４４

研究課題名（和文）幼児の社会・情緒的問題の評価尺度日本語版ITSEAの標準化と活用をめざして

研究課題名（英文）Standardisation and utilisation of the Japanese version of the ITSEA, an assessment scale for social and emotional problems in toddlers

研究代表者
河村　秋（Kawamura, Aki）

和洋女子大学・看護学部・准教授

研究者番号：５０７１９０９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：日本語版ITSEAを用いた全国調査から1. 記述回答内容を分析し、月齢群別：A37 A42、E17について有意な差、男女別：A41、E17について、男児が女児よりも高い傾向だった。
２．属性ごとの得点比較から、男児は、外在化領域の、女児は内在化領域の問題を持つ傾向、12-17か月児は他月齢より外在化、内在化領域の問題は低い傾向だが、睡眠の問題があり、社会情緒的能力が低かった。米国幼児は外在化領域の問題を持ち、社会・情緒的能力が高く、日本幼児は、内在化領域に問題を持つ傾向だった。早産児は友達への攻撃や感覚的敏感性が高く、また、町村在住児は、行動/衝動性、全般的不安、感覚的敏感性、共感性が高かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本語版ITSEA（Infant-Toddler Social and Emotional Assessment)は、１～2歳児の社会・情緒的問題、能力を査定する尺度である。1歳代の言語発達の途上である幼児にも適用できることで養育者がなんとなく気になる子どもの社会情緒面の特徴について明らかにすることができるものである。本研究では日本の標準的な幼児のデータを収集、分析することで日本の幼児の月齢、性別、出生時の状況、居住地による社会・情緒的問題、能力についての特徴、標準値を明らかにできた。今後日本語版ITSEAを用いて、幼児とその養育者への支援の方策や方向性の指標にできるように開発を続けたい。

研究成果の概要（英文）：Results of the Japanese ITSEA National Survey:1.Analysis of descriptive responses showed significant differences by age group: A37, A42, and E17, and by gender: A41 and E17, boys were higher than girls.
2.Comparison of the mean scores of each domain subscale item group by attribute showed that boys had problems in the externalizing domain and girls had problems in the internalizing domain. 12- to 17-month-olds tended to have lower problems in the externalizing and internalizing domains than other age groups but they had sleep problems and lower socio-emotional abilities. U.S. infants tended to have problems in the externalizing domain and higher social-emotional competence, while Japanese infants tended to have problems in the internalizing domain. Preterm infants had higher levels of aggression toward friends and sensory sensitivity, and those living in towns and villages had higher levels of behavioral/impulsivity, general anxiety, sensory sensitivity, and empathy.

研究分野：乳幼児精神保健、母子保健分野

キーワード：社会情緒的発達　自閉スペクトラム症　幼児　行動問題

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

1. 研究開始当初の背景

平成 17 年に発達障害者支援法が施行、平成 28 年には改正発達障害者支援法が成立され、日本では、発達障害についての知識も広まり、行政の支援の方策も増えている。

しかし、乳幼児健診において早期発見のためのアセスメントツールを用いている市町村が全体の 1 割に満たない、保育所、幼稚園、小学校、中学校、高等学校に進学する過程で支援が途切れたりサービスが低下する、発達障害者の就職率が低いなどの問題があがっている。

発達障害の早期発見や早期支援の必要性が認識されながらも、適切な支援につながらないのは、養育者が子どもの特徴を受け入れられない場合や、乳幼児健診などで要支援とされながらも、支援者側がどのようなサービスにつなげるべきかがわからない、何かおかしいとは気づくが、その気づきを明確にできずに支援につなげられない場合も多いと推測される。

ITSEA（Infant-Toddler Social and Emotional Assessment）は、米国の Alice S. Carter、Margaret Briggs-Gowan らにより 1 歳～3 歳未満児の社会情緒的･行動的問題、能力について査定するために開発されたツールである 2）。子どもの主な養育者が記入する質問紙で 170 項目、4 領域（外在化問題、内在化問題、調整不全問題、能力）と 3 項目群(不適応項目群、社会的関係性項目群、異常項目群)、さらに、詳しい検査が必要とされる特徴や行動の項目と、養育者の心配の程度を問う項目からなる。子どもの育てにくさや発達についての気がかりを感じている養育者に対して ITSEA によるアセスメントを行なうことで、その育てにくさや気がかりの原因がどのような問題領域のものなのか、その子どもにとって強みとなる能力はどのような能力なのかを査定することができる。

2. 研究の目的

本研究では、日本語版 ITSEA の標準化とマニュアルの完成を目指す。さらに、日本語版 ITSEA でアセスメントした子どもの特徴から、必要な支援、つなげるべきサービスは具体的に何かを検討することで、育てづらさを持つ子と養育者への支援の指標としたい。

3. 研究の方法

全国調査

1)研究デザイン　方法論的研究;質問紙調査

2)研究対象者1～3歳未満の幼児 1,000 名とその養育者を対象とした web 調査。日本の地方9区分から、政令指定都市･特別区とそれ以外の市町村で、人口構成（平成27年度国勢調査を基準）に比例した層化二段抽出法を用いた。男女各500名、月齢群（12～17、18～23、24～29、30～35 か月）各250名で、調査については民間の調査会社に対象のリクルート、質問紙の配布と回収を依頼した。

3)使用した尺度

（1）属性アンケート（子どもの月齢、養育者の年齢、性別、教育年数、子どもの出生順位、配偶者の有無、世帯収入、在胎週数、出生時体重、妊娠･出生時の問題の有無･内容、通院を要する疾患の有無･内容）

（2）日本語版 ITSEA（170 項目）

4）平均得点、標準偏差値の算出：全国調査で収集した 1,000 例を対象に、月齢･男女別の各領域、下位尺度、各項目の標準値を算出した。 月齢･性別･出生時の状況（出生時体重、在胎週数）･居住地の規模による得点の差異を検討した（t 検定、分散分析）。

5）記述項目（A8,A36,A37,A41,A42,B21,B22,B23,C5,E15,E16,E17）の内容についてこわがるもの、場所などについての設問、子どもの行動についての設問に分けて、月齢群別、男女別の傾向についてテキストマイニングを用いて分析した。

4. 研究成果

2020 年：原版 ITSEA の版権保持会社、尺度会社との交渉、全国調査の準備を実施した。

2021年：月齢4区分×男女で、特に健康について問題を持たない児の養育者を対象に全国調査（1000 件）を実施した。

2022 年：2021 年の調査から属性ごとに、日本語版 ITSEA 各領域、下位尺度ごとの平均得点を算出し統計分析を行った。不足データ収集のため市町村発達センターへの依頼交渉を行った。

2023 年：1. 記述回答項目の内容について、月齢群、男女別項目の平均得点を比較、さらに記述項目内容をテキストマイニングで分析した結果、月齢群別：A37、A42、E17 について有意な差が見られた。男女別：A41、E17 について、男児が女児よりも高い傾向であった。記述内容から抽出された子どものこわがる対象は、鬼、暗い、掃除機、気になる子どもの行動は頭、くるくる回る、紙などであった。2. 男児は、外在化問題、女児は内在化問題を持つ傾向、月齢が高くなると外在化、内在化問題が多くなる、能力が高まる傾向が明らかになった。米国の幼児の方が外在化問題を持ち、能力領域が高い傾向、日本の幼児は、内在化問題を持つ傾向が見られた。

2024 年：1. 月齢群ごとの比較では、12-17 か月児は他の月齢群と比較して外在化、内在化問題は低い傾向であるが、睡眠問題が高く、能力が低い傾向であった。2. 男女別での比較では、男児は外在化問題が高く、女児は内在化問題が高い傾向だった。3. 出生時の状況による各領域下位尺度得点の比較では、体重による相違はなく、早産児は友達への攻撃、調整不全領域の感覚的敏感性が高い傾向であった。4. 市町村単位ごとによる各領域下位尺度得点の比較をしたところ、外在化領域の行動/衝動性

得点、内在化領域の全般的不安得点、調整不全領域の感覚的敏感性得点、能力領域の共感性得点において町村に在住する児が他よりも高い傾向が見られた。

しかし、今回の研究では、日本語版 ITSEA の結果からつなげるべき支援、サービスの検討までは実施できず、マニュアルの作成には至らなかった。今後の研究へとつなげていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 河村秋、小渕隆司、小稲文、矢郷哲志	４．巻 65
２．論文標題 養育者が心配する１～ 2 歳児のこわがる対象と行動の分析	５．発行年 2024年
３．雑誌名 和洋女子大学紀要	６．最初と最後の頁 77-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Aki Kawamura, Takashi Obuchi, Fumi Koine, Satoshi Yago, Takahide Omori
２．発表標題 Social and emotional characteristics of 1- to 2-year-olds Differences by age in months and gender using J-ITSEA and comparison with U.S. data
３．学会等名 4th Edition of International Public Health Conference　（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 河村秋、小渕隆司、矢郷哲志、大森貴秀、廣瀬たい子、岡光基子
２．発表標題 日本語版 ITSEA の臨床的妥当性の検討
３．学会等名 第31回 日本乳幼児医学・心理学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小渕　隆司 (Obuchi Takashi) (50457818)	北海道教育大学・教育学部・教授 (10102)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	矢郷　哲志 (Yago Satoshi) (00778243)	東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・助教 (12602)	
研究分担者	小稲　文 (Koine Fumi) (00602731)	国際医療福祉大学・成田看護学部・助教 (32206)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関